

『共観福音書註解』における「聖定の思想」と摂理 — 贖罪 —

森 川 甫

I. はじめに

1. 研究目的

本研究は、カルヴァンの『共観福音書註解』の根本思想を追求することを目的とする。『共観福音書註解』と『ヨハネ福音書註解』は 1555 年に別々に刊行され、同年合本『福音書註解』として出版された。Jean Calvin⁽¹⁾, *Concordance de l'Harmonie* …, 1555⁽²⁾ (略号：『共観福音書註解』) のマタイによる福音書 26 章において、“Ordonance” という語を十数語発見した。それらを引用し、考察する。第 1 章、カルヴァン『福音書註解』における「聖定の思想」を序説とし、第 2 章、カルヴァン『福音書註解』と「聖定の思想」— イエス・キリストの受肉 — (『京都大学基督教学紀要』第 9 号第 2 集、2021 年 3 月 31 日、略号『紀要』)、第 3 章、カルヴァン『福音書註解』と「聖定の思想」— イエス・キリストの十字架による贖い —、第 4 章、カルヴァン『福音書註解』と「聖定の思想」— 復活・昇天・キリストの支配 —、第 5 章、キリストの再臨と終末論、という順序で研究を進める予定である。

上記論文中、第 3 章「カルヴァン『福音書註解』と「聖定の思想」— イエス・キリストの十字架による贖い —」を考察することを本論の目的とする。

2. 研究方法

上記『紀要』において報告したごとく、Richard Stauffer、François Wendel、Wilhelm Niesel、Richard A. Muller の研究方法を参照する。

「聖定の思想」が、カルヴァンの『福音書註解』の根本思想に、「受肉」「贖い」「復活」「昇天」「キリストの支配」「キリストの再臨」と、「終末論」において一貫して流れていることを考察する。

3. 先行研究

Herman Bavinck, *Reformed Dogmatics*, Baker Academic, a division of Baker book house company, Fifth printing, November 2009. ; Herman Bavinck, *Our Reasonable Faith*, Eerdmans 1956.

松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』（上）（下）聖恵授産所出版部、1984年。岡田稔著「聖定論について」『岡田稔著作集第5巻 神学論文』いのちのことば社、1992年。牧田吉和著『改革派教義学第2巻 神論』一麦出版社、2014年。牧田吉和著『改革派教義学第7巻 終末論』一麦出版社、2019年。春名純人著『「ハイデルベルグ信仰問答」講義』聖恵授産所出版部、2003年。

4. 主な参考文献

Jean Calvin, *Concordance qu'on Appelle Harmonie Composée de trois Evangelistes*, asçavoir S. Matthieu, S. Marc, et S. Luc; avec les Commentaires de Jehan Calvin, Paris, 1555. Bibliothèque Nationale du France (所蔵) ; Jean Calvin, *et Institution de la Religion Chrétiens avec sa Sources Révolution de sa Pensée Ruligionne*, Paris, P.U.F., 1950. ; Ioannis Calvini, *Evangelium Ioannis Commentarii*, Paris, 1555. ; Jean Calvin, *Institutio de la Religion chrétienne*, Paris, 1559.

拙訳『カルヴァン・新約聖書註解Ⅰ 共観福音書・上』新教出版社、1984年。拙訳『カルヴァン・新約聖書註解Ⅱ 共観福音書・下』新教出版社、2022年。山本功訳『カルヴァン・新約聖書註解Ⅲ ヨハネ福音書・上』新教出版社、1963年（略語『ヨハネ福音書註解』）。ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要（略語『綱要』）改訳版 第1篇・第2篇』新教出版社、2007年。ジャン・カルヴァン著、渡辺信夫訳『キリスト教綱要改訳版 第3篇』新教出版社、2008年。関川泰寛、袴田康裕、三好明編『改革派教会信仰

告白集 — 基本信条から現代日本の信仰告白まで』教文館、2014年。

Ⅱ. 本論 カルヴァン『福音書註解』と「聖定の思想」 — イエス・キリストの十字架による贖い —

聖定と摂理について

『ウェストミンスター信条』における(1)『信仰告白』および(2)『小教理問答』において、「聖定論」は明確に表明されている。

『ウェストミンスター信仰告白』は、第三章「神の永遠の聖定について」の第一項において、「神は、全くの永遠から、ご自身の意志の最も賢く聖い意向によって、じっさい、起こりくる事を何でもすべて、自由に、また不変的に定められた。とはいえ、それによって、神が罪の創始者にならず、また、被造物の意志に暴力が加えられることもなく、さらにまた、第二原因の自由や偶然性が取り去られず、かえって確立されるような仕方、そうされたのである」⁽³⁾とある。『小教理問答』問7では、「神の聖定とは、それによって神が、ご自身の栄光のために、起こってくる一切のことを前もって定めておられる、そのように御心みこころの計らいに従った、神の永遠のご計画です」⁽⁴⁾とある。

同じく『ウェストミンスター信仰告白』第五章「摂理について」においては、第一項において、「すべてのものの偉大な創造者である神は、じっさい、その最も賢く聖なる摂理によって、すべての被造物と行動と事物を、最大から最小に至るまで、その誤ることのない予知と、ご自身の意志の自由で不変の意向とに従い、自らの知恵と力と義と慈しみと憐れみの栄光が賛美されるように、支え、導き、整え、統治される」⁽⁵⁾とある。

「ヨハネによる福音書」と「創世記」にみられる「初め」の相違

ゲツセマネの園の祈りと「聖定」(マタイ 26:39、マルコ 14:35-36)

「少し進んで行って地面にひれ伏し、できることなら、この苦しみの時が自分から過ぎ去るようにと祈り、こう言われた。『アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります。この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わ

たしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように。』(マルコより、以下福音書からの引用は新共同訳による)

ここでイエスが想起しているのは、永遠の秩序である聖定であり、これはヨハネ福音書1章1節で「初めに言があった」と表されている永遠の聖定に関わるものである。

「初めに、神は天地を創造された」(創1:1)の「初めに」は、時間的・歴史的秩序に属するものである。「聖定」と「摂理」とは、密接な結びつきがあり、イエスがこの永遠の聖定を想起したのち、摂理、救いの御業が次々と激しく展開されている。

1. 救いのみ業(摂理)の展開

イエス・キリストの救いの御業は、エルサレム入場からイエスの十字架上の死による罪の贖い、陰府への下降に至るまで、激しく展開されている。

1-1. エルサレム入城(マルコ11:1-10)

「一行がエルサレムに近づいて、オリーブ山のふもとにあるベトファゲとベタニアにさしかかったとき、……(中略)……多くの人が自分の服を道に敷き、また、ほかの人々は野原から葉の付いた枝を切って来て道に敷いた。そして、前を行く者も後に従う者も叫んだ。『ホサナ。主の名によって来られる方に、祝福があるように。我らの父ダビデの来るべき国に、祝福があるように。いと高きところにホサナ。』」

これに関して、カルヴァンは、

キリストは「死が近づいていたので、御国の性質がいかなるものであるかを、厳かな行為によって示すことを望まれた」と述べ、「王を名乗ろうとして振る舞い、今や王であることを自由に述べておられるのは、主の生涯の終わりが近づいているのを意識されたから。」

であると説いている。こうして、「王の高貴さを御自身のものとすることを望まれるキリストは、ろばに乗って、エルサレムに入城された」⁽⁶⁾。

1-2. いちじくを呪う (マルコ 11:12-14、20-26)

カルヴァンは、このイエスの呪いに関して、

その木に実がならないようにと、断罪している。逆に、神は戒めによって実を授けておられる。

と述べている⁽⁷⁾。

1-3. 神殿での叱責 (マルコ 11:15-17)

「それから、一行はエルサレムに来た。イエスは神殿の境内に入り、そこで売り買いしていた人々を追い出し始め、両替人の台や鳩を売る者の腰掛けをひっくり返された。(以下省略)」

これに関してカルヴァンは、

神殿の威厳にふさわしいものが何もなかったのも、そこに市を開き、商売をし、金銭の交換をする銀行屋の姿が見え、容易に神聖冒瀆が蔓延した。そこで、キリストはこのことに激昂された。何故ならば、この習慣は不誠実な利益を求める祭司長たちの貪欲によって導かれたことは、非常によく知れ渡っていたからである。

と解説している⁽⁸⁾。

1-4. イエスを殺す計画 (マルコ 11:18、14:1)

「祭司長たちや律法学者たちはこれを聞いて、イエスをどのようにして殺そうかと謀った。群衆が皆その教えに打たれていたもので、彼らはイエスを恐れたからである。」(11:18)。

これに関してカルヴァンは、

彼らはこれらの不幸な者たちの邪悪な企みが容易に実行できなかった。何故ならば、神の密かな聖定と配慮によって、キリストは十字架の死に定められていたからである。

と指摘している⁽⁹⁾。

「さて、過越祭と除酵祭の二日前になった。祭司長たちや律法学者たちは、なんとか計略を用いてイエスを捕らえて殺そうと考えていた。」(14:1)。

これに関してカルヴァンは次のように註解している。

キリストは御自身を死すべき者として喜んで捧げられるが、それは起こるべくして起こることだったのである。というのも、神への服従を示す犠牲によってのみ、神は喜んでくださるからである。更に、キリストは、必然性によって御自身が死へと引きずり込まれるのだといった考え方のために、弟子たちが傷ついたり落胆したりすることのないよう望まれた。……(中略)……キリストはエルサレムで死を迎えることを望んでそこへわざわざ出かけられたのである。その期間ずっと、安全な場所へと逃れる自由があったにもかかわらず、キリストはすべてを承知の上で、自ら進んで死すべき運命へと飛び込まれたのである。この時点で、弟子たちはキリストがそのように行動されたことが、父なる神への服従によるものだと予告されても、それを理解することはなかったが、きわめて異例の意味を持ったこの教えによって、後に、彼らは信仰を確立した。更に、今日私たちに素晴らしい益がもたらされる。なぜならば、世の人々のすべての咎を消してくださる自発的な犠牲を鏡に映すように生き生きと私たちは見るからである。そして、御子が進んで大きな勇気をもって死に向かって行く時私たちは御子が死に勝利しておられるのを見るのである⁽¹⁰⁾。

1-5. ベタニアで香油が注がれる (マルコ 14:3-9)

「イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粹で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。(以下省略)」

これに関してカルヴァンは、

貴重な香油はその香りのためではなく、キリストを葬る心構えができて
いるという点において喜びを象徴するものなのである。この象徴を用い
て、キリストは、御自身の墓が全世界に命と救済を息づかせるための芳
しい香りとなるのだと証明することを願っておられる。

と説いている⁽¹¹⁾。

1-6. ユダ、裏切りを企てる (マルコ 14: 10-11)

「十二人の一人イスカリオテのユダは、イエスを引き渡そうとして、祭司長
たちのところへ出かけて行った。彼らはそれを聞いて喜び、金を与える約束
をした。そこでユダは、どうすれば折よくイエスを引き渡せるかとねらっ
ていた。」

これに関してカルヴァンは、

キリストが人類の救いのために、犠牲として進まれることを理解するの
は容易であったので、鉄のような心を和らげるはずのものであった。し
かし、ここで邪悪の感情がいかに大きいものであるか、そしてまた、そ
れが人間の精神を惑わし、いかなる効果を持つかを、鏡のように私たち
は見るのである。

と人間の弱さを指摘している⁽¹²⁾。

1-7. 過越の食事の準備 (マルコ 14: 12-17)

「除酵祭の第一日、すなわち過越の小羊を屠る日、弟子たちがイエスに、『過
越の食事をなさるのに、どこへ行って用意いたしましょうか』と言った。(以
下省略)」

この過越の食事について、

安息日の前日に除酵祭を祝ったキリストは、律法によって定められた祭

りの日を守られたということになる。律法の掟から少しでも離れないように、キリストが細心の注意を払っておられることが分かる。私たちを律法のくびきから解放するために、キリストは律法に縛られることをお望みになり、見落としのないように非常に小さい条項まで忘れないよう目を配られたのである。

とカルヴァンは解説している⁽¹³⁾。

1-8. 裏切りものへの言及 (マルコ 14: 18-21)

ユダの裏切りに関してカルヴァンは次のように述べている。

キリストは、神が決定されたこと以外、ユダが何もしていないという理由で、ユダの罪が赦されるということを否定し、ユダは常に有罪であると述べておられる。というのは、神は正しい裁きによって私たちの贖罪の代価として御子の死を定められたけれども、キリストを裏切ることによってユダは正しい処罰を受けた。何故ならば彼は不正と貪欲に満ちていたからである⁽¹⁴⁾。

1-9. 主の晩餐 (マルコ 14: 22-25)

「一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えて言われた。『取りなさい。これはわたしの体である。』(以下省略)」

「取りなさい、これはわたしの体である」という主イエスの言葉は、超越の祝いの晩餐と、新しいより優れた晩餐が混合しているということの意味しているのではなく、むしろ、前者の晩餐の終わりを示している。

とカルヴァンは理解する⁽¹⁵⁾。

1-10. ペトロの離反を予告する (マルコ 14: 27-31)

「(27-30 節は省略) ペトロは力を込めて言い張った。『たとえ、御一緒に

死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません。』皆の者も同じように言った。」

神が手を差し伸べられている以上のことを、私たちは求めるべきでないということが教えられている。というのは、無思慮な熱心さほど、^{うば}萎み行き、一時的なことはないからである。弟子たちは彼らの主を捨てることほど、卑しく、馬鹿げたことはないと感じている。それ故、彼らはそのような行為をまさに嫌っている。しかし、約束に信頼を置くことなく、祈りを怠っていたので、無思慮にも急ぎすぎて、持っていない忠節を彼らは自慢するようになったのである。

とカルヴァンは述べている⁽¹⁶⁾。

1-11. ゲツセマネで祈る (マルコ 14:32-40)

「一同がゲツセマネという所に来ると、イエスは弟子たちに、『わたしが祈っている間、ここに座っていなさい』と言われた。……(中略)……弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。彼らは、イエスにどう言えばよいのか、分からなかった。』⁽¹⁷⁾

1-12. 裏切られ、逮捕される (マルコ 14:41-46)

「イエスは三度目に戻って来て言われた。……(中略)……ユダはやって来るとすぐに、イエスに近寄り、『先生』と言って接吻した。人々は、イエスに手をかけて捕らえた。」

イエスにユダが進み寄ってきたことに関して、カルヴァンは次のように述べている。

福音書記者たちは、主が起こることを預言しておられると、注意深く述べている。そこから次のように言うことができるであろう。キリストは、邪悪な人々が神の隠れた目的を実行するように仕向けられている場合以外には、外的な暴力によって死に引っ張られることはなかったので

ある。それ故、憂鬱で、そして恐ろしい光景が弟子たちに示されたけれども、彼らは同時に、確信を持たせる証拠を受けたのである。というのは、事件そのものは、偶然によって試されていないことが示されており、キリストの預言が、彼らにキリストの神的な栄光を見るように導いたからである⁽¹⁸⁾。

1-13. 最高法院で裁判を受ける (マルコ 14 : 53-65)

「人々は、イエスを大祭司のところへ連れて行った。祭司長、長老、律法学者たちが皆、集まって来た。(以下省略)⁽¹⁹⁾」

これに関してカルヴァンは、次のように考察すべきことを述べている。

十字架の躓きを取り除くために、キリストが「自分を無にして」(フィリピ 2 : 7) ということから得る教えを考察しなければならない。というのは、このように、測り知れない神の慈愛と恩恵の有効性が、不快な、あるいは恥に満ちたところのあらゆるものを、その輝きによって動かされるのが、見出されるであろう。肉によれば、神の子が捕らえられ、縛られ、そして囚人とされることは恥辱に満ちたことである。しかし、彼の鎖によって私たちは悪魔の圧政から解放され、神の御前で罪から解放されるのである。私たちの信仰を襲う躓きの石を道から取り除くだけでなく、その躓きの石に代わって、私たちに愛する独り子を与えるために、神の無限の恩寵を称えることが起こるのである。キリストが御自身を惜しむことなく、自ら進んで私たちの魂が解放されるように、私たちに対して驚くべき愛の保証を与えてくださるのである⁽²⁰⁾。

「そこで、大祭司は立ち上がり、真ん中に進み出て、イエスに尋ねた。『何も答えないのか、この者たちがお前に不利な証言をしているが、どうなのか。』しかし、イエスは黙り続け何もお答えにならなかった。そこで、重ねて大祭司は尋ね、『お前はほむべき方の子、メシアなのか』と言った。イエスは言われた。『そうです。あなたたちは、人の子が全能の神の右に座り、天の雲に囲まれて来るのを見る。』(以下省略)」

メシアかと聞かれて肯定するイエスについて、カルヴァンは次のように述べている。

もしイエスが、御自身をキリストであると宣言するならば、彼を罰するのに十分な根拠のある犯罪である、と大祭司は思った。しかし彼らは皆、救い主から救済されると自慢していたので、最初に、そのようなことが事実かどうかを尋問しなければならなかった。その手によって人々を救うキリストがいるならば、彼らはあえて否定しなかったであろう。イエスは、キリストという名をもって公に現れた。このこと自体を何故、彼らは考えないのか。正確な決定をなす方法によって、何故彼らはしるしを吟味しないのか。ところが彼らは既に、キリストを死罪につけることを決めていたので、キリストが御自身に、神の栄光を要求されたというこのことによって、彼らは満足したのである⁽²¹⁾。

1-14. ペトロ、イエスを知らないと言う (マルコ 14 : 66-72)

「ペトロが下の中庭にいたとき、大祭司に仕える女中の一人が来て、ペトロが火にあたっているのを目にすると、じっと見つめて言った。『あなたも、あのナザレのイエスと一緒にいた。』……(中略)……ペトロは呪いの言葉さえ口にしながら、『あなたがたの言っているそんな人は知らない』と誓い始めた。するとすぐ、鶏が再び鳴いた。ペトロは、『鶏が二度鳴く前に、あなたは三度わたしを知らないと言うだろう』とイエスが言われた言葉を思い出して、いきなり泣きだした。」

ここでのペトロについて、カルヴァンは次のように述べている。

ペトロは、福音の教え全体を否定するようなことは、決してしていない。彼はただ、「彼がその人を知っていた」ということを否定している。キリスト御自身の中に、ペトロは約束された和解の光を埋めて、恥知らずな裏切りにしてしまったのである。

1-15. 十字架につけられる (マルコ 15:14-28)

「ピラトは言った。『いったいどんな悪事を働いたのか。』群衆はますます激しく、『十字架につけろ』と叫び立てた。ところが人々は、イエスを十字架につけるようにあくまでも大声で要求し続けた。その声はますます強くなった。ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。……(中略)……そして、十字架につけるために外へ引き出した。そこへ、アレクサンドロとルフォスとの父でシモンというキレネ人が、田舎から出て来て通りかかったので、兵士たちはイエスの十字架を無理に担がせた。』⁽²²⁾

十字架へと向かうイエスに関して、三人〔マタイ、マルコ、ルカ〕は、ただ、ピラトが群衆の叫びと怒号に圧倒されて、恥ずべきことに、キリストを死刑にするために手渡したと述べている。私たちは二つの点、双方に注目しなければならない。彼が法廷に上ったのは、その意思に反して強制されたものであること、しかし、無罪であると宣言したこの人を罪に定めて、彼自身が法廷を代表していることである。というのは、御子に全く罪がないのでなければ、私たちの贖罪とその成就をその死に求めるべきではないからである。他方私たちにふさわしい刑罰を代わりに担ってくださるのでなければ、私たちは今、刑罰の只中に留まっているであろう。それ故、神は愛によって私たちが御前で罪を赦されるために、御子が厳かに刑罰を受けることを望まれた。

とカルヴァンは解説している。

「そして、イエスをゴルゴタという所——その意味は『されこうべの場所』——に連れて行った。……(中略)……イエスを十字架につけたのは、午前九時であった。罪状書きには、『ユダヤ人の王』と書いてあった。また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。」

このようにして、聖書のみ言葉は成就された。

十字架にイエスが付けられたことについて、カルヴァンは次のように述べている。

恥辱が絶頂となったのは、キリストが二人の強盗の真ん中にかけてられた時である。彼らはあたかも主が強盗の頭であったかのように、主に最上の席を与えたのである。もし主が一人で十字架にかけてられたならば、主の事件は、他の犯罪者とはかけ離れたものと見えたとはいえずであるが、今や主は彼らに混じっただけでなく、もっとも憎むべき者とされたのである⁽²³⁾。

1-16. イエスの死 (マルコ 15: 33-39)

「昼の十二時になると、全地は暗くなり、それが三時まで続いた。三時にイエスは大声で叫ばれた。『エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。』……(中略)……しかし、イエスは大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた。」

キリストの死について、カルヴァンは次のように述べている。

キリストの死において、肉体の弱さが、少しの間、神の栄光を陰らせ、御子は恥辱と恥と侮蔑の中に横たわり、(パウロの言うように) 空にされたが、それでも天の父は確かにいくつかの特質を目印とされた。最後の拒絶において、神は来るべき栄光の前兆を起こして、十字架の悪名に立ち向かう敬虔な者たちを支えてくださった。キリストの威光を素晴らしく証ししたのは、日蝕、地震、裂けた岩、引き裂かれた幕であり、まるで天地がその創造主に対し当然の礼拝を捧げたかのようなのである。……(中略)……神の不在を嘆かれながらも、信仰によって、主は神の存在を見ておられたからである。別の箇所でも注意したように、私たちの救いの益となるために、キリストが贖罪主の務めを完全に果たされるために、その神聖は肉の弱さに屈せられた⁽²⁴⁾。

「百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『本当に、この人は神の子だった』と言った。」

さらに、イエスの死に立ち会った百人隊長について、カルヴァンは次のように解説している。

マルコは、百卒長がこのように語ったのは、キリストが死に際して、大きな叫びを上げられたからだと言う。ある注解者たちは、大きな叫び声はその機能を死の瞬間まで保っていた人から出たのは、並外れた力であると考え。そして確かに、キリストの体は事実上、消耗されきっており、胸や肺が大きな叫び声を上げる力を持つことは人間として不可能であった。百卒長が称賛したのは、神の名を呼び続けるキリストの不屈の忍耐であったと私は思う。百卒長に主を敬わせたのは、キリストの叫びだけではなかった。というのは、彼の告白は、天の奇跡に匹敵する主の驚くべき力を見て、彼から引き出されたものだからである。

もし百卒長が主を認め、主は正しいとして罪状を否認したとすれば、彼は同時に主を神の御子と宣言したことになる。彼がいかなる形でキリストは父なる神の御子であるのか、正確に理解したというのではなく、主には何か神聖なものがあることを疑わなかったということであり、彼は主が普通の人ではなく、確かに主は神から出た方であると確信していたということである⁽²⁵⁾。

こうして贖いの業が成し遂げられた。通常ならば十字架上で力なく死に絶えるところ、大声で叫んでおられるのは、神の御子が十字架の死に自ら進んで向かっておられることを示している。

幕が裂けたのは、古い律法から新しい福音が開かれたことを意味し、そしてこの光景を見た百人隊長が神の御子だと証言しているのは、まさに信仰告白である。そして、キリストは陰府に降られた。

2. 教理の展開と聖定の思想

教理の展開の中に、「聖定の思想」が一貫して次のように流れている。

2-1. 『ハイデルベルク信仰告白』

ハイデルベルク教会がカルヴァンに対して、難解でない信仰告白を求めたので、弟子のド・ペーズ⁽²⁶⁾を通して簡潔明瞭な文章を提示した。カルヴァンがその作成に当たって直接指導した『ハイデルベルク信仰告白』(1557年)を参照する。

第40問 なぜキリストは、死の苦しみを、受けなければならなかったのですか。

答 神の義と真理とのゆえに、神の御子の死による以外のものによっては、われわれの罪のために、支払われることはできなかったからであります⁽²⁷⁾。

この第40問の問答について、春名純人は次のように述べている。

神の義と真理とのゆえに、神の御子の死による以外のものによっては、われわれの罪のために、支払われることはできなかったからである。人間に求められているのは、神に対する愛を貫徹することである。人間が受けなければならないのは、罪に対する神の刑罰である。「我が神、我が神、なんぞ我を見捨て給いし」と叫ばれた。最後まで、神の義が満足されるまで、この恐ろしい神の刑罰、すなわち、身体と霊における遺棄を、完全な神と人への愛を貫徹する中で、耐え忍ばれた。キリストの服従は誕生に始まり、苦難の地上生涯を経て、最後の十字架の死に至るまでの、神の律法に対する積極的服従と、罪人に対する刑罰の律法規定に対する服従である。この両方の服従をキリストは貫徹してくださったのである。(中略)。キリストは死を滅ぼして下さっただけでなく、わたしたちを死の恐怖からも解き放して下さった⁽²⁸⁾。

第41問 なぜ、主は、葬られたのですか。

答 それによって、彼が本当に死なれたということを証しするためであります⁽²⁹⁾。

第 42 問 キリストが、わたしたちのために、死んで下さったのなら、どうして、わたしたちも、死ななければならないのでしょうか。

答 わたしたちの死は、私たちの罪の代価の支払いではありません。そうでなく、わたしたちの死は、罪の絶滅と永遠の生命への入口なのです⁽³⁰⁾。

第 43 問 わたしたちは、キリストの十字架の犠牲と死から、さらに、どのような益を得るのでしょうか。

答 その御力によって、わたしたちの古き人が、キリストと共に、十字架につけられ、死んで、葬られるという益であります。それによって、肉の悪しき欲が、わたしたちの中で、もはや支配せず、わたしたちが、自分自身を、主に感謝の供え物として捧げるようになるためです⁽³¹⁾。

第 44 問 なぜ「陰府に下り」という言葉が続いているのですか。

答 わたしの主キリストが、十字架においても、それまでの御生涯においても、その魂において忍ばれた、名状し難い不安、苦しみ、恐れによって、地獄の不安と苦しみから、わたしを救い出して下さったということを、わたしが、最も厳しい試練の中にあるときにも、確信するためであります⁽³²⁾。

春名は、次のように述べている。「ヘルマン・バヴィンクは、聖書は字義通りの場所的な陰府への下降については何も語っていないと述べている。キリストは、死の瞬間に、魂はパラダイスにおられ、体は墓の中に休まれた。これが復活までの間、キリストが死の支配の下に留められた意味であり、その間に陰府という場所に行っておられたなどとは語られていない」⁽³³⁾。

また、春名は、バヴィンクの次の言葉を、この解説において引用している。「キリストは、この時が来ていることを知っておられた。それで、彼は、自発的にご自分を渡されたのである。その時は、彼が愛と従順の最高の霊的力を発揮された時であったが、彼は全く無力に見えた。敵は彼にしたいほうだ

いのことをしていた。やみは彼に打ち勝った。まさしく事実上、彼はその時、場所的な意味ではなく霊の意味で、陰府に下られたのである」(ヘルマン・バヴィンク著、松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』下巻、聖恵助産所、1985年、203～206頁)⁽³⁴⁾。

2-2. 『キリスト教綱要』第2篇第16章「仲保者」

『キリスト教綱要』第2篇第16章では、

「キリストは我々の救いを獲得するために、どのような方法で贖い主の務めを全うしたもうたか。ここで彼の死、復活、そして昇天について論じられる」⁽³⁵⁾。

第16章5節ではキリストの従順を取り上げ、

キリストはどのような方法で罪を廃絶し、我々と神との不和を除去し、また神を我々に対して慈しみ深くかつ好意的にする義を勝ち取ったかが問われるならば、これを我々のために果たしたのは、従順の完成によってであると一般的に答えることができる。これは「一人の人の違反によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって我々は義とされた」(ローマ5:19)とのパウロの証言により証明される⁽³⁶⁾。

カルヴァンは、同箇所でも、キリスト御自身による贖いを、多くの聖書記事によって解き明かしており、キリストの贖罪の御業は、端的には『使徒信条』では「……十字架につけられ、死にて葬られ、三日目に死人のうちより甦り、……」と要約されている⁽³⁷⁾。この贖いの御業は、永遠のはじめに父なる神とともに計画された救いの御業である。

2-3. ヘルマン・バヴィンク (Herman Bavink 1854-1921)

ヘルマン・バヴィンクはキリストの預言者職に関連して、他の預言者職との共通性と同時に他の預言者を凌駕する彼自身の独特無比の預言者性について次のように要約している。

- i. 昔の預言者は僕であったが、彼は御子であり（マタイ 21：37）、唯一の先生（マタイ 23：8、10、ヨハネ 13：13-14）であった。
- ii. 彼はすべての預言者と同様に召命と油そそぎ、神の言葉の啓示と宣教、預言と奇跡の力の賜物にあずかられたが、彼の油注ぎは永遠からであり、聖霊による身ごもりから始まり、洗礼のときに聖霊を受け、彼ご自身が肉体となった言葉であったのであり、一度限りの神の完全な啓示であった。以前に語られたすべての預言の成就であり、この終わりの日には御子によって語られたのである（ヘブライ 1：1）。
- iii. 父祖たちによって語られた預言は彼に起因し、預言者たちのうちにあつて証されたのは彼の御霊である（I ペトロ 1：11）、その証言内容はキリストであった（黙示録 19：10）⁽³⁸⁾。

上記の要約は、永遠のはじめに定められた贖罪の御業を、イエス・キリストが果たされたことを示しているのである。

キリストが十字架において成就された完全ないけにえは、全世界の罪の和解のために十分な無限の力と価値を持っている。聖書はつねに、全世界を贖いと再創造に関係づけている。（中略）全世界のためのキリストのいけにえのこの十分性ゆえに、和解の福音はすべて造られたものに宣べ伝えなければならない。福音の約束は、十字架につけられたキリストを信じるものはだれでも滅びることなく永遠のいのちを得るということである。それで、この福音は、神が御旨によって福音を送ることをよしとされた全ての国民と民族に、分けへだけなく宣べ伝えられ、提供されなければならないのである。それだけではなく、悔い改めて信じるように命令されなければならない⁽³⁹⁾。

キリストは祭司職として贖いの業を遂行されるが、それは独特な性格を有している。すなわち、ご自身をいけにえとして贖いの業をなされるということである。この業を果たされるために、永遠のはじめにおける主の聖定に従って、イエス・キリストは十字架に向かって一途に歩まれたのである。

Ⅲ. 結び

救いの御業の出来事（摂理）の展開は、エルサレム入城から、ユダの裏切り、ペトロの否み、最高法院におけるピラトによる死刑判決、ついには十字架上の死、贖いの完成に至るまで激しく展開され、その中に永遠の初めに御父とともに救いの御業を計画された御子イエス・キリストが存在している。それは、イエス・キリストの存在を軸として、その周りを救いの御業が激しく展開する羽根独楽^{こま}のようである。

註

- (1) Jean Calvin, 1509-1564.
- (2) Jean Calvin, *Concordance qu'on Appelle Harmonie Composée de trois Evangelistes, asçavoir S. Matthieu, S. Marc, et S. Luc ; avec les Commentaires de Jehan Calvin*, Paris, 1555. Bibliothèque Nationale du France (所蔵)。拙訳『カルヴァン・新約聖書註解Ⅱ 共観福音書・下』新教出版社、2022年。
- (3) 村川満・袴田康裕訳「ウェストミンスター信仰告白」、関川泰寛・袴田康裕・三好明編『改革派教会信仰告白集——基本信条から現代日本の信仰告白まで——』教文館、2014年、499頁。
- (4) 松谷好明訳「ウェストミンスター小教理問答」関川他編、同上、654頁。
- (5) 村川他訳 関川他編、前掲、502頁。
- (6) 拙訳『カルヴァン・新約聖書註解Ⅱ 共観福音書・下』新教出版社、2022年、175頁。
- (7) 同上、189頁。
- (8) 同上、185頁。
- (9) 同上、190頁。
- (10) 同上、308頁。
- (11) 同上、313-314頁。
- (12) 同上、314-315頁。
- (13) 同上、316頁。
- (14) 同上、320頁。
- (15) 同上、322頁。
- (16) 同上、333-334頁。

- (17) 拙稿「ジャン・カルヴァン『福音書註解』と「聖定の思想」(私家版)第四章「『共観福音書註解』における聖定と摂理 — 復活・召天・再臨 —」の、「一 復活 — 救いの御業の進展 — 陰府への下降 —」、46 頁、参照。また、ジャン・カルヴァン、拙訳『共観福音書註解 下巻』新教出版社、2022 年、341-342 頁、参照。
- (18) 同上、348 頁。
- (19) 同上、356 頁。
- (20) 同上、357 頁。
- (21) 同上、357 頁。
- (22) 同上、382-383 頁。
- (23) 同上、392 頁。
- (24) 同上、406 頁。
- (25) 同上、409 頁。
- (26) Théodore de Bèze, 1519-1605.
- (27) 春名純人『ハイデルベルク信仰問答』聖恵授産所出版部、2003 年、174 頁。
- (28) 同上、175-176 頁。
- (29) 同上、176 頁。
- (30) 同上、177 頁。
- (31) 同上、178 頁。
- (32) 同上、184 頁。
- (33) 同上、185-186 頁。
- (34) 同上、186-187 頁。
- (35) ジャン・カルヴァン、渡辺信夫訳『キリスト教綱要改訳版 第 1 篇・第 2 篇』新教出版社、2007 年、548 頁。
- (36) 同上、552 頁。
- (37) 同上、552-554 頁。
- (38) ヘルマン・バヴィンク、松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』(上)、聖恵授産所出版部、1984 年、158-159 頁。
- (39) ヘルマン・バヴィンク、松田一男訳『信徒のための改革派組織神学』(下)、聖恵授産所出版部、1984 年、194-195 頁。